



宮崎大学学術情報リポジトリ

University of Miyazaki Academic Repository

造形表現・図画工作・美術における「質感」の意識
を高めるための授業開発および実践研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 宮崎大学教育学部附属教育協働開発センター 公開日: 2017-04-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 樺島, 優子, 幸, 秀樹, 高口, 章子, 中馬越, 恵美, 岩切, 武志, 小林, 美紀, Takakuchi, Ayako, Nakamagoe, Megumi, Iwakiri, Takeshi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10458/5967

造形表現・図画工作・美術における 「質感」の意識を高めるための授業開発および実践研究

樺島優子*、幸秀樹*、高口章子**、中馬越恵美**
岩切武志***、小林美紀****

A Practical Study of Class Development for Raising Awareness of ‘Texture’ about the Representation of Art in A Kindergarten, An Elementary school and A Junior high school

Yuko KABASHIMA*, Hideki YUKI*, Ayako TAKAKUCHI**,
Megumi NAKAMAGOE**, Takeshi IWAKIRI***, Miki KOBAYASHI****

I. はじめに

本研究は、造形表現・図画工作・美術において、ものの「質感」に対する子どもたちの意識を高めることで表現・鑑賞活動をより豊かにするための教材開発および授業実践研究である。形・色・材質は、造形の三要素である。今日の情報化社会の急速な進展の中で、情報の多くが言語や視聴覚分野に偏った形で提供されている現状を是正することを目的として、子どもたちの生活環境からますます縁遠くなってきたリアルな造形素材と触れ合う機会を増やし、このことで種々の材料が持つ多様な質の違いに気づき、さらにはそれらを自在に組み合わせて新しい造形を生み出す能力を育てたい。そこで、本論では殊に‘デジタルネイティブ’の子どもたちにとっては、身の回りの多種多様なリアルな質感を体験し、さらにはその質感を活かした表現をすることで想像力や構想力を強化していきたいと考える。このような材料の性質を感じ取り、表現・鑑賞に結びつける能力のことを、ここでは仮に「質感力」とよんでおきたい。

筆者たちは、平成27年度から継続して幼稚園では、〈身近な素材を使った質感を楽しむ実践〉を行い、また、小学校及び中学校では、対象学年の〈発達段階に応じた質感の学習〉に焦点を絞り授業実践を行ってきた。授業実践の後、それぞれの授業についての分析や課題の抽出、検証を行い、質感への意識を高めるためのより有効な授業を提案した後、それに関する実践的授業研究を行った。さらに加えて、アーティスト（大学教員）による質感に関する研修授業を附属小学校において行った。

本研究内容は、図画工作・美術科の「共通事項」である、形や色に関する事項、イメージに関する事項とも密接に関連しており、いわば「質感力」は、子どもの感性的発達や日常生活体験の場を通して培われていくものである。実際に、平成28年度の授業実践においては、子どもたちが、多様な「質感」を楽しむ様子や、表現・鑑賞活動の中でも質感にこだわる姿が見てとれた。（Ⅲ、実践研究参照）これまで「質感」に特化した実践研究はあまりされてこなかったことから、本研究を契機として、発達特性に応じた「質感力」養成のための新たな教材開発が

*宮崎大学教育学部, **宮崎大学教育学部附属幼稚園

宮崎大学教育学部附属小学校, *宮崎大学教育学部附属中学校

進み、その結果「質感」に対する子どもたちの意識が向上し、自らの生活環境に生かせる力が育つことを期待するものである。

II. 質感力強化の必要性

今日に至るまで図画工作科や美術科の中で触覚的特質である質感は視覚的要素である形や色ほどには取り上げられてこなかった。V. ローウェンフェルドが、描画の発達においては視覚型と触覚型があることを指摘したことはよく知られるところである。しかし、両者の型は明確に分けられるものではなく、眼あるいは触覚における知覚の度合いに応じていずれかの傾向性を示すことを指摘している。¹⁾ さらに、「視覚による印象が他の感覚的印象によって、いかに影響され形づくられたか、形状や輪郭の知的理解が視覚的、情緒的経験といかに融合されたかということを知るのである。視覚的知覚は眼でみることだけではたして十分に知覚できるものであろうか。われわれは最も純粋な形の視覚的知覚は、視覚的知覚一般の極端な場合にすぎないと結論せねばならぬであろう」と述べている。²⁾ 従って、ここでローウェンフェルドは、対象を知覚する場合、触覚の基礎となる質感を度外視しては成り立たないと言っているのである。このことから、両者は相補的であり協働的關係にあるともいえよう。本研究の目的は、この関係を踏まえ、表現・鑑賞活動におけるいわば「質感力」の教育的意義を明らかにし、教育現場で有効な教材開発の指針づくりを目指すものである。

質感を支える材料 = material の語源は mater (母) であり、またその容器ともいべき形式は pattern (父) である。すなわちその形と内容はいわば父母の關係にありそこから生ずる創造物が作品ということになる。この關係は分離不可能であると考えられる。しかし、これまでの図画工作・美術(以下、図工・美術)の教材は形に比べて材料特性から生じる材質感に対してはそれほど着目してこなかったといえよう。そこで、子どもたちには、とくに身の回りの造形物がどのような材料によって支えられているのかについて注目させ、形と内容の相即不離な關係を理解させたい。このことは、作品制作の過程においても常に意識しておかなければならない事柄である。数々の造形教材において、たとえば材質感が作品の仕上がりに大きな影響を与えるものに陶芸などがある。原材料そのものの風合いが作品の仕上がりに直接に影響を及ぼすものである。もちろんあらゆるジャンルの作品が多かれ少なかれ原材料の制約を受けることは言うまでもない。ところが翻って、この制約が作品の個性や独自性に結びつくものでもあることも容易に察せられる。

では、いまなぜ質感が問題になるのか、今日のゲーム機器の氾濫する社会において仮想表現された質がリアルな生活場面にあたかも本物であるかのように入り込んでくるという仮想と現実の転倒が引き起こす危惧がある。問題は、仮想の質が本物の質に短絡するとき大きな問題を生じさせることである。ここには現実の生の身体という質の不在がある。このような短絡を多少なりとも回避する手立てとして本物の質を経験することが重要となる。本研究が「質感」に着目した理由がここにある。殊に、幼少時期から青年期にかけて、しっかりと本物の質に触れその特性を手肌を通して認識しておくことが求められる。

1. 材質とは

ここで材質についてみておきたい。材質とは材料の性質のことである。柳宗悦は材料と品物の關係を次のように言っている。「品物を作るには何より材料に拠らなければならぬ。品物の

異なるにつれて、異なる材料が呼ばれてくる。だがむしろ材料が品物を呼ぶといった方がいい位である。端溪が出て初めて硯が存在を得たともいえよう。適宜な材料を俵って品物が初めて品物らしい品物になるのである。」³⁾ この説はちょうどレヴィ=ストロースの言うブリコラージュ (bricolage 器用仕事) を想起させる。いわく器用人は「ありあわせの道具材料を用いて自分の考えを表現する」のである。ここには、「表現」計画の種類と同数の資材集合の存在が前提となり、それは単に資材性〔潜在的有用性〕のみによって定義されるとする。すなわち、〈まだなにかの役にたつ〉という原則によって集められ保存された要素でできおりどのような操作にも使える操作媒体 (オペレーター) である。⁴⁾

こうしたいわば材料からの呼びかけがJ.J.ギブソンの「環境のアフォードンス」であろう。つまり、「環境が動物に提供する (offers) もの、良いものであれ悪いものであれ、用意したり備えたりする (provide or furnishe) ものである。」⁵⁾ さらに、「個体は、その状態によってさまざまな種類の製作をアフォードする。火打ち石のようなものは削ることができるし、粘土のような物はこねることができ、さらにその他のある物は形をかえられてもなお元の形態を回復するし、ある物は形を変えることに強く抵抗する」⁶⁾ レヴィ=ストロースの資材性〔潜在的有用性〕がここでもうかがえる。そこで、材料の持つ潜在的有用性を開示する手段、つまり「操作媒体」となるものが手の働きである。ギブソンはこのことについて次のように述べている「製作とは、その言葉が意味するように元来、手の操作のような手の行動の一形態であったことに注意して欲しい。物は手によって作られたのである。このような場合に物質を固定することは、それを用いて何ができるかを、それが何に役立つかを、そしてその有用性を知覚することである。そして、それには手が関係しているのである」⁷⁾ という。材料が手の働きを促しその資材性〔潜在的有用性〕を引き出す、まさに「材料が品物を呼ぶ」のである。

2. 質感力

材料からその有用性を引き出すためには、直接手を介して材料に触れてその特性を把握しなければならぬ。このことによって材料の声を聞くのである。法隆寺の修復に携わった宮大工棟梁の西岡常一は、大工が最も気にすることは木のくせだという。木のくせを知り、そのくせを堂塔にうまく組み合わせることの重要性を説く。⁸⁾ 標題に掲げた「質感」を知るということは、材料個々の特性を理解した上で表現計画を組み立てるための前提となるものである。D. カッツによると理性は手の活動に由来しており、何かをイメージすることも手の活動が頭にひらめいていることを指摘している。⁹⁾ また、観察する、イメージする、現れるなどは視覚に関係するがもとは触・運動領域から派生しているという。動詞の「イメージする」はもともと土などをこねるという意味をいう。また、「考える」が「行為」から導出されたのであれば、土をこねる行為はイメージしたり考えたりする行為に他ならない。¹⁰⁾ 図工・美術における質感の学習とは、とりもなおさず手を媒介にして材料を構成する質そのものと関わりながら表現計画を達成するものであるといえよう。一般的に表現を促すものは想像力であるが。この想像力について中村雄二郎はG.バシュラールを援用しつつ次のように述べる。「ここでわれわれは、バシュラールのように物質的想像力を形式的想像力と区別され対立するものとして考えるよりも、想像力の働きをいっそうダイナミックにとらえるためにその物質面に着目した」。¹¹⁾ そこで、バシュラールの区別より重要なことは、「イメージにおける質的 (物質的) なものの独自の力」をみとめたことにあるという。そして、その質的力が習慣化し惰性化したイメージとその

相関者である秩序とを分解し解体させ、そこにあらわれる質的（物質的）なものや感性的なもの解放によってイメージと秩序を更新する働きのうちに、想像力の能動性と自由とを見ることができると説く。¹²⁾ 質感の学習が、物質的想像力と形式的想像力をダイナミックに結びつけることで感性の覚醒を促し新たなイメージと秩序を子どもたちの生活場面に取り戻すことが期待できる。ここに「質感」についての学習（質感力の学習）の意義を認めることができる。

3. 質感に関する幼稚園教育要領・小・中学校学習指導要領の事項

ここで質感に関する事項が、どのように幼・小・中において定義されているか把握するために、幼稚園教育要領解説、小学校学習指導要領解説 図画工作編、中学校学習指導要領解説 美術編における質感に関する記述を、以下にまとめる。

幼児期はとくに生活する中で自分の身の回りにあるものに触れたり、確かめたりしながら、それらがどのような感触か、体験的に獲得していくものである。幼稚園教育要領の5領域にある〔環境〕〔言葉〕〔表現〕の3領域にまたがって質感に関連する記述がみられ、とくに、実際にもものに触れることや手触り、感触を試すなどの記述事項が多い。すなわち、幼児期において、小学校につなげていくための質感の把握の元となる体験活動を多く取り入れていくことが示されているのがわかる。

小学校指導要領解説 図画工作編では、平成20年の改訂で新たに加えられた文言である教科目標の「感性を働かせながら」の「感性」の解説箇所に、「視覚や触覚などの様々な感覚を働かせながら」という記述があるように、視覚と同様に触覚を重要視していることが見てとれる。また、〔共通事項〕における記述の中に、質感に関する箇所が多くみられ、A表現 B鑑賞のいずれの活動にも、いわゆる質感力を用いて表現、あるいは鑑賞するように考慮すべきとある。幼児期と同様に、実際に材料を手に触れてその特徴をつかんだり、実際に紙を破るや彫刻刀で木を彫るなどの行為における、ものの手ごたえや、その触覚を重要視している。高学年になると表面の材質感の違いなど、ものを比較してその違いを把握したり、ものの材質の質感の効果を考へて、材質の違うものを効果的に組み合わせることでその変化を考察したりと、より高度な質感力の育成が期待されている。

中学校学習指導要領解説 美術編でも、「実物と直接向かい合い、実感をもって質感をとらえさせることが理想である」と書かれているが、「それができない場合は、大きさや材質感など実物に近い複製、作品の特徴がよく表されている印刷物、ビデオ、コンピュータなどを使い、効果的に鑑賞指導を進めることが必要である」とも書かれている。これは、実際にそこに存在しないもの、あるいは2次元の画像情報をもとに質感を想像し、鑑賞活動を効果的に行うことも視野に入れた記述である。この活動は、幼稚園・小学校と実物に触れて体験し獲得した質感力の基盤があってこそ可能となる活動である。また、「材料のもつ地肌の特徴や材質感人間の感情を大きく左右する」とし、質感は「人間の感覚や感情に強く働きかける視覚的な特性がある」ため、形や色彩と同様に欠かせない重要な要素であると書かれている。中学校では、このことを、表現及び鑑賞活動を通して、体験や知識から実感的に理解させるようにし、より実践的な質感力を習得できる教材開発が必要となってくる。

以上のように、各学校園種において、それぞれの学年の発達段階を考慮した質感力の育成の重要性が見てとれた。また、質感力に関しては、幼・小・中と段階的にその難易度があり、体

験から始まり、それを土台にして質感の比較・把握をし、特徴を捉えることができ、効果的に質感を使えるようになると、より実践的創造的な質感力につながっていくステップがあることが理解できた。これは、質感という感覚もまた学習し鍛錬されながら、獲得し得るものであることを示している。

Ⅲ. 附属幼稚園・小学校・中学校での授業実践研究

これまでみてきた「質感」に関する研究をふまえ、幼稚園では、身近な素材を使った質感を楽しむ実践を行い、小学校・中学校では、対象学年の発達段階に応じて、質感の感じとり方やとらえ方を工夫し、授業実践を行った。授業実践後、より質感の意識を高めるためにはどうすべきか授業研究を行った。

1. 附属幼稚園の実践（担当教諭：高口章子、中馬越恵美）

(1) 研究テーマ

「身近な素材を使い質感を高める」

(2) 目的

- イメージを膨らませながら素材に触れ、その感触を味わう。
- 子どもたちが全身を使い遊ぶことで満足感を味わいながら素材に親しもうとする。
- 素材の感触を味わいながら、言葉で質感を表現しようとする。

(3) 方法

- 対象年齢：4歳児（年中児）
- 材料：身近な素材である絵の具を使った。
- 環境構成：指で絵の具の感触を味わう事が出来るように机を準備した。
思いきり楽しめるように壁にビニルを貼ったり、床に模造紙を貼り合わせた。
子どもが汚れを気にしないようにビニルの服を準備した。
- 方法：今回は絵の具の感触を味わうことが出来る指絵の具を準備することにした。
指絵の具の感触の違いを味わわせるために、水の量を意図的に変えた。



図1 指絵の具に触れる瞬間の様子



図2 指絵の具の感触を存分に楽しむ幼児たち

(4) 指導案

平成28年6月28日	4歳児	宮崎大学教育学部附属幼稚園 (高口章子)
「指絵の具で遊ぼう！」		
子どもの活動	・環境の構成 ◎教師の援助	準備物
<p>保育室で、ビニル袋の洋服に着替える。</p> <p>『えのぐたのしみまん』に変身する話を聴く。</p> <p>3カ所の机にグループで分かれる。教師が各机に4色の絵の具を出すのを待つ。</p> <p>全ての机に準備が終わったら、一斉に絵の具で遊ぶ。</p> <p>机の上で主に手を使って遊ぶ。</p> <p>絵の具に水を入れて触ってみる。</p> <p>机の上で主に手を使って遊ぶ。</p> <p>足の裏に絵の具をつけて遊ぶ。</p> <p>壁に絵の具をつけて遊ぶ。</p> <p>画用紙に描く。(絵の具をつける) 片づけをする。</p>	<p>・テラスに、事前にビニルで覆った机を置き、壁にビニルを貼り、床に模造紙を敷いておく。</p> <p>◎子どもたちが全身を使って遊べるように、下着の上にビニル袋で作った洋服を身に付けさせ、裸足で待つようにさせる。</p> <p>◎「絵の具で何をしようか。楽しいことをしよう。」と呼びかけ、みんなで『えのぐたのしみまん』に変身し、遊びへの期待をもたせる。</p> <p>・机は、人数に応じて、両手が思い切り伸ばせるくらいの広さを確保する。</p> <p>・4色の絵の具それぞれを塊で机に出す。</p> <p>◎子どもたちの目の前に絵の具の塊を出すことで、絵の具に触りたい気持ちや遊びたいという思いを高める。</p> <p>◎子どもの要望に応じて、絵の具を足していく。子ども一人一人の自由な発想や全身を使っての遊びを十分に認める。</p> <p>◎混色もよい。</p> <p>◎「どんな感じがする?」「つるつる?」「すべすべ?」などの感触を表す言葉をかけながら一緒に遊ぶ。</p> <p>・絵の具の量は子どもの要望に応えられる十分な量を準備する。</p> <p>◎元の絵の具に水を入れることで、絵の具の質感の違いに気付かせるようにする。</p> <p>◎水を入れたことで、その前の絵の具の感触と変わったところを聞きながら、一緒に楽しく遊ぶ。</p> <p>・子どもが足でも絵の具の感触を味わえるように、床に模造紙を敷いておく。</p> <p>・壁にビニルを貼り付け、好きなように絵の具をつけられるようにする。</p> <p>◎子どもの自由な発想を認める。</p> <p>・洗い桶とホースを準備しておく。</p>	<p>ゴミ袋の洋服 指絵の具 (白・赤・緑・黄)</p> <p>水</p> <p>洗い桶</p>

(5) 活動の振り返り

- いろいろな絵の具の色をはじめから出したのが良かった。感覚を刺激し、はじめから働きかけやすい。
- 絵の具をつける素材として、ビニルや模造紙など、いろいろな質感をもった素材が置いてあるといい。

- 素材そのものの質感を楽しみながら、色が重なり、新しい色を発見していた。
- 今回の活動で版画をするとおもしろい。プリントするとおもしろい。
- 全身で子どもたちが楽しんでいて、この時期だからこそやってほしい。
- 最初に、絵の具を出すときに、触るのを待たせたことが良かった。
- 机を広く使い、場所が動きやすかったのが良かった。
- 壁にもビニルを貼り、普段、絵の具をつけられないところにつけられるから、おもしろい。
- いつもの空間が、全身を使えることでおもしろくなった。

(6) 子どもの反応

- 子どもの言葉・・・「早く触りたい」「白がほしい」「先生、黄色!」「ピンクになった」
「黄緑になった」「マヨネーズみたい」「つるつるする」「すべすべ」「ぬるぬる」
「気持ちいい」「楽しい」「おもしろい」「迷路をしてる」「足にも（絵の具を）つけたい」
「描くものがほしい」「手形をつけたい」「先生、見て見て」「おもしろかった」

(7) 成果と課題

1) 成果

- 指絵の具を素材として用いることで質感を楽しみながら、つるつるやぬるぬるなど、新しい触感があることに気づかせることができた。
- 様々な色の指絵の具を準備し、思い切り活動できる環境を整えたことで、自分から触りたいという気持ちを引き出すことにつながった。
- 子どもたちは友達と一緒に楽しい体験をする中で、感動した言葉や楽しさを共有する言葉などを表現していた。この体験が子どもの素直な表現を生み出すきっかけになったと思われる。
- ビニルの服を着ていたので、自分の身体にも絵の具を付ける体験にもつながった。

2) 課題

- 子どもの感触を高めていくためには、いろいろな素材に触れる経験が必要であるので、どのような素材に触れたらよいか教材研究をする必要がある。



図3、4 壁にもビニルを貼っておくことで、可能となった活動の様子。まるで洞窟壁画のようである。

2. 附属小学校の実践（担当教諭：岩切武志）

（1）質感の効果を理解するための比較する鑑賞

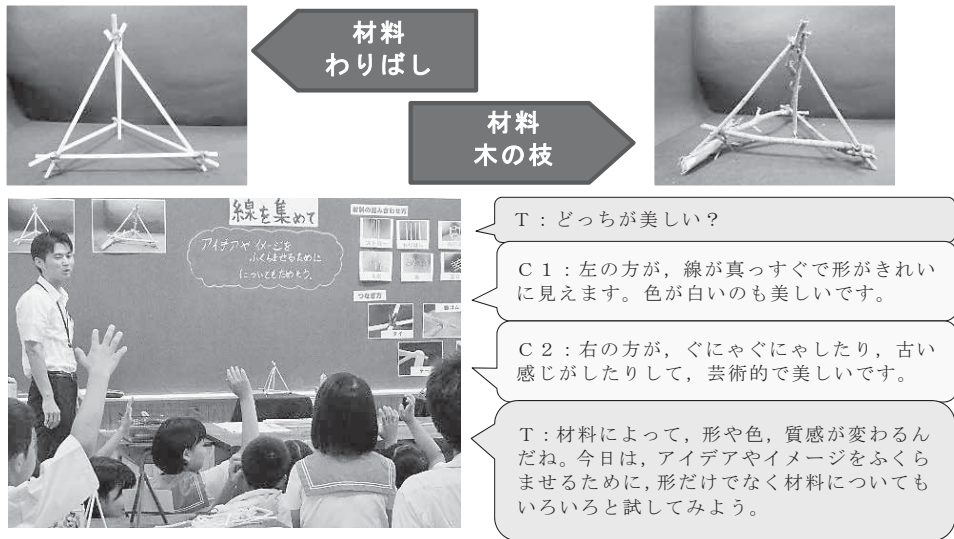
材料の質感を子どもが自分の感覚や活動をとおして捉えることができるように、教師が準備した2つ以上の教材を比較して鑑賞することを取り入れた。最初の印象やその根拠について話し合う中で、質感だけでなく、形や色、奥行きや動き等の造形的な特徴に関する発言を取り上げて板書し、自分の表現や仲間の表現を見るとき参考となるようにした。

○題材：第5学年「線を集めて」

（細長い材料を組み合わせて、美しいと感じる立体に表す題材）

○実践のねらい

材料の組み方は同じであるが、材料の異なる立体を比較して鑑賞することをとおして、材料の質感によって、全体的な印象が変わることや、形・色・質感の組み合わせによってどのような美しさを生み出しているかについて気付かせ、表現に生かせるようにしたいと考えた。



材料わりばし

材料 木の枝

T：どっちが美しい？

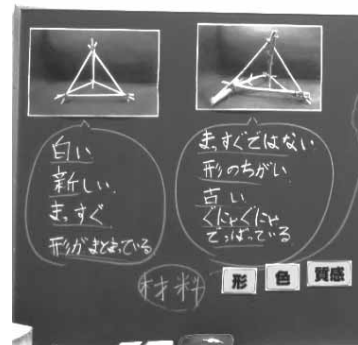
C1：左の方が、線が真っすぐで形がきれいに見えます。色が白いのも美しいです。

C2：右の方が、ぐにゃぐにゃしたり、古い感じがしたりして、芸術的で美しいです。

T：材料によって、形や色、質感が変わるんだね。今日は、アイデアやイメージをふくらませるために、形だけでなく材料についてもいろいろと試してみよう。

○考察

「どちらが美しいか」という視点で比較する鑑賞を行ったことで、材料がもつ形や色、質感などの造形的な特徴の効果に気付かせることができた。教師が語り出しを指定して話し合わせることで、造形的な特徴やイメージを基にした話し合いをさせることができた。しかし、つくる活動中に仲間に積極的に分かろうという意識はまだ低いので継続して指導を続けていく必要がある。



(2) アーティストとの連携

通常の担任が一人で指導を行う授業では、担任は子どもへの指導や支援を行っており、造形的な創造活動を子どもと共に行うことは難しい。しかし造形的な創造活動のプロセスを子どもの目の前で見せることが質感や形・色等の材料の特徴を捉えて発想や構想を刺激することになると考えた。そこで、担任以外に造形的な創造活動のプロセスを演示することが可能な3名のアーティストに授業に協力していただいた。アーティストは「教えない図工・共に創る」をキーワードに、子どもの造形的な創造活動を支援した。

○題材：第5学年「銀のパレード」

(アルミホイルの特徴やパレードのイメージから、立体に表す題材)

○実践のねらい

アーティストと連携することで、アルミホイルのもつ質感や可塑性、接着性等の特徴を生かして造形するおもしろさに気付かせるとともに、豊かな発想を引き出したいと考えた。



① 試しの作品をつくらせながら、アルミホイルの質感や可塑性、接着性等の特徴に気付かせた。



② 子どもの作品に加えてアーティストの作品を並べて「パレードしたらおもしろいものをつくろう」という提案を行った。



③ 子どもと共につくり、児童の目的に寄り添いながら、必要なときにはアーティストの技術や知識を貸した。



④ 終末では、アーティストが中心となり、完成した作品に光を当て、影を使った鑑賞を行った。

○考察

アーティストとのかかわりをとおしてアルミホイルの特徴を子どもはしっかり捉え、イメージをひろげていた。イタリアのレッチョ・エミリアの教育で実践されてきたように、教育者とアーティストがそれぞれの役割を担うことで、創造的な授業を円滑に行うことができた。

第5学年2組 図画工作科学習指導案

授業者 岩切武志

アーティスト 大泉佳広, 大野匠, 樺島優子

1 題材名 銀のパレード

2 題材の目標

A 表 現	【造形への 関心・意欲・態度】	○ アルミホイルによる造形を試しながら、パレードしていたらおもしろいと感じる立体をつくる活動に取り組もうとしている。
	【発想や構想の能力】	○ アルミホイルの特徴やパレードのイメージから、つくりたいものを思い付くことができる。
	【創造的な技能】	○ アルミホイルを使い方を工夫することができる。
	【鑑賞の能力】	○ アルミホイルでつくった立体の表現のよさや特徴等を捉えることができる。

3 本時の目標

アルミホイルの使い方を工夫して、パレードしていたらおもしろいものをつくることができる。

4 指導過程

学習活動及び学習内容	○ 教師のかかわり ● アーティストかかわり
1 アーティストについて知る。 ○アーティストの作品鑑賞	● アーティストの作品を鑑賞することで、アーティストへのあこがれや本時への意欲を高める。
2 本時の活動について話し合う。 ○アルミホイルによる試しの造形 ○試しの造形物の整列 ○本時のめあて <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content;"> パレードしていたらおもしろいと思うものをつくろう。 </div>	○ 試しの活動として1枚のアルミホイルから造形することで、アルミホイルの質感や可塑性、接着方法を理解することができるようにする。 ● アーティストが造形した作品も一緒に整列させることで、パレードの動きや方向感を捉えやすくする。 ○ 材料、場所、時間について確認することで、見通しをもって造形活動に取り組めるようにする。 ○ グループにアルミホイルを1本ずつ与えることで、自然と互いの造形活動を鑑賞しながら活動ができるようにする。 ○ 感じたことや造形的な特徴について話し合う姿を称賛することで、望ましいかかわり方を価値付けるようにする。 ● 子どもと一緒に造形活動したり、子どもの表現を認めたりすることで、子どもの発想を刺激したり、子どもがつくる喜びを味わうことができるようにする。
3 パレードしていたらおもしろいと思うものをつくる。 ○アルミホイルを使った造形活動 <ul style="list-style-type: none"> ・ まるめる ・ 重ねる ・ ねじる ・ つなぐ ・ 巻く ・ やぶる ・ 芯材の活用 ・ 型取り ・ 材料の組合せ 等 	○ つくった作品の中からお気に入りの1つずつを選択して並べることで、それぞれの作品のよさや、パレード全体のよさを感じることができるようにする。 ● 光を当てて影絵で鑑賞することで、形のおもしろさに気付くことができるようにする。
4 パレードのように並べて鑑賞する。 ○1列に並べての鑑賞 ○光を当てての鑑賞	
5 本時の学習についてふりかえる。 ○作品を思い付いたきっかけや工夫 ○アーティストや仲間とのかかわり	○ 作品を思い付いたきっかけや工夫、アーティストや仲間とのかかわりをふりかえらせることで、発想が広がり、つくりだす喜びを味わえたことを実感できるようにする。

5 本時でめざす子どもの姿

アーティストがアルミホイルを細く巻いて使うのを見て、ぼくもアルミホイルをねじってみたよ。すると針みたいになったのでハリネズミをつくったよ。パレードの中に並べてみたら、前の恐竜を針でつついて追いかけているようでおもしろかったよ。



3. 附属中学校の実践（担当教諭：小林美紀）

（1）「質感」をどのように考えさせていくか

質感は、見た目の質感と、触ったときの感触（触感）からのものがある。大抵の場合、見た目の質感と触覚によるものは同じイメージになることが多いが、（触感が）見た目通りではないものや、触ることができないものもあるため、質感を端的に表現することが難しい場合がある。作品制作において、質感の表現をするためには、対象となるものの観察を具体的にを行い、特徴をとらえて、その特徴をどのようにして表現するのが最適かを考え、実行する必要がある。しかしながら、現時点では生徒たちの既知の技法だけでは表現できないものや、技法を知っていても使いこなすことのできないものもあるので、自分なりの表現に違和感を感じても、どのように修正すればよいか分からないため困り感をもつ場合が多い。中学校の学習指導要領のA 表現の（3）において、発想や構想したことを基に、自分の表現を具現化するために、材料や用具などを活用して描いたり、作ったりする「創造的な技能」の指導事項がある。よりよく表現するために、形や色彩、材料や光などの性質や感情を理解しながら、材料や用具の特性を考え意図的に生かすことを目指している。素材のもっている感じや素材の性質の違いから受ける感じを表す質感を表現するためには「創造的な技能」が必要となる。表現対象の質感を真似ること、そっくりに表現することは、ただ単に形や色を真似るだけでなく、技量を要することである。形や色の組み合わせ方や、描き方などから近づけていくことは困難な面もあるが、「どのようにすればいいか」と課題意識をもって追求する態度を培うことが目標達成につながると考える。

（2）年間指導計画の中での「質感」に関連する主な題材

- | | | | |
|----|-----|---------|----------------------|
| 1) | 1年生 | 4月・5月 | 「質感を表すオノマトペを文字絵にしよう」 |
| | | 6月・7月 | 「質感標本をつくろう」 |
| | | 2月・3月 | 「紙粘土で謎の生き物を作ろう」 |
| 2) | 2年生 | 10月・11月 | 「紙で本物そっくりの石がつかれるか」 |
| 3) | 3年生 | 4月・5月 | 「フェイクフードをつくろう」 |

（3）「質感」表現の中の学び

「そっくりに作る」ことが目標であるので、自ずと対象を観察することになる。したがって、フェイクフードのような題材の時には、表面的な形を似せるために、既知の食品や料理（紙媒体に印刷したもの）を参考にしながら、立体に起こしていく作業を行った。写真の中に現れているのは触れて確かめることのできない2次元の質感である。だからこそ、創造力を働かせ、表面の処理を行っていく必要があるのである。実際に触って「やわらかい」ものを作るわけではなく、「やわらかそうに見えるもの」を作るのであるから、そう見えるようにするためにはどのようにすればいいかを考えなければならない。お菓子づくりや料理を経験し、手順が分かっていると作ることのできるものもあり、実生活での経験が生かされる部分もある。また、質感を表現するためには、形や色も関連してくるので、混色の方法や粘土の取り扱い方法など既習事項を駆使して質感の表現に取り組むことが必要となってくる。

(4) 「質感」を意識した授業づくり

1) 素材・題材について

2年生：「紙で本物そっくりの石がつかれるか」

今回の素材は「紙（新聞紙・和紙）」であるが、あえて加工の仕方にはほとんど言及せず、材料と何を作るかを提示して、ヒント程度の情報のみ与える。生徒の中から出た質問やアイデアを、適宜周りの生徒に紹介しながら進めていくと、自分で情報を取りに行く状態が出てきて、さらに人の制作をみながら「自分もやってみたい」と思う生徒も出てきた。その活動の中の生徒のつぶやきに、「どうしたら石の質感が紙で作れるのだろうか」というものがあった。

2) 授業の実際

導入として、事前にサンプルで作っておいた紙の石と本物の石を混在して置き、それを映像として画面上で見せることで、本物か本物ではないかを見分けさせる。光の当て方によっても異なるが、石ではないとすぐ分かったものと、なかなか分からないものがあり、実際に触ってみることで、軽さなどが違うことが分かるようにする。

次に身の回りから拾ってきた石を観察し、紙でその石に似せて作るにはどうしたらよいかを考えさせる。張り子や型どりについては簡単な紹介のみで終わる。また、どんなところが似ていればそっくりになるかを考えさせる。それから、そのように表現するにはどのようなことをすればよいかを考え、制作に入る。

材料は新聞紙、書道半紙（和紙）、洗濯のりを提示する。その他アクリル絵の具を準備させ、石の制作に入るが、まずは「形」を真似ることからはじめさせた。準備した石によって大きさがまちまちであることから、型どりや張り子形式の制作方法を考えていた生徒は、対象の石が小さい場合は別の制作方法を選択することがあった。サイズをそっくりにする場合と、やや大きめに作る場合とあったが、上限を指定しておき、自分の制作スピードなどに合わせて考えさせた。型どりや張り子形式の制作の場合は、乾燥させた後石を取り出す作業が必要となる。また、紙粘土方式の場合は、新聞紙を細かくちぎって水分を与え、さらに洗濯のりを入れて揉み込んで紙粘土を作るところから始めるので、どのくらいの量が必要かを考えさせながら制作していった。紙粘土の場合、揉み込んだ結果、成形がしやすくなり、乾燥前に和紙を貼るとなじみやすい上、新聞紙の色が加わって灰色になっているので色合いも石に近づき、途中からこの方法に切り替える生徒もいた。

色つけについては、アクリル絵の具で混色し、石の色を作らせた。しかし、同じ色ですべてを塗る傾向にあったので、再度石を観察させて、場所によって異なる色合いや、不純物や付着物などについても表現させるために、何色も色を作ることが必要であることを伝えた。また、モダンテクニックの一つであるスパッタリングを使うことで、色を複雑に表現することができ、色の付け方も工夫が見られるようになった。仕上げとして、乾いた布で磨く、洗濯のりで表面をコーティングする、ガラスビーズの粉や砂をつけ、手触りを変えるなど、より質感を似せるために工夫をするようになった。和紙の重ね方やシワなどから、紙の感じが残ることを嫌い、紙のちぎりがたをより細かくする、逆にちぎらずに包むようにするなど、石に似せるために見た目や表面の状態、形などを生徒それぞれが悩みながら表現していった。適宜他クラスの作品などを見せることで刺激を受け、どうやったらそのような表現になるかを、周りと相談したり、考えて材料や道具を求めたりと夢中で制

作する様子が見られるようになった。「石感」ではなく「紙感」がいつまでも残るので、どうしたらよいかという質問もあり、質感を追求する姿が見られた。

3) 評価等について

生徒によるものとしては、自己評価及び他者評価を行った。他者評価については、完成作品と自己評価の文章をもとに、評価規準をあらかじめ伝え、評価者が判断する。

作者が工夫点などを書き、鑑賞者がそれを読むことによって、自分のしなかった表現について知ることとなる。

(自己評価から・学んだこと、工夫など)

- ・砂をつけるとより石っぽい手触りになる。
- ・たくさん色を重ねることでいい色を見つけられる。
- ・今まで試したことのない絵の具の混ぜ方をした。
- ・凸凹を出すために半紙を重ねる枚数を場所によって変えた。
- ・新聞紙と水、洗濯のりを混ぜると紙粘土のようになること。
- ・紙の石が濡れたままスパッタリングをすると色がにじみやわらかくなること。



図5 ワークシート

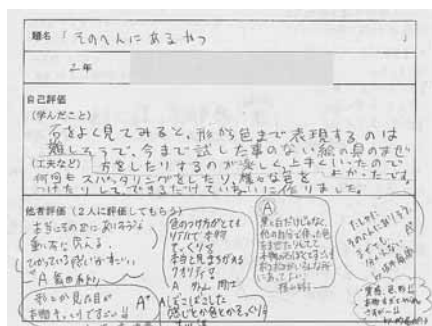


図6 自己評価及び他者評価シート



図7 出来上がった紙の石

(5) 成果と課題

- 1) 成果
 - ・立体物を作る題材の場合は、対象の触感や材質感から質感の表現を意識しやすく、質感を表現する方法を追求する姿勢が見られた。
 - ・実際に触ったことにより出てくる言葉と、見た目のイメージにより出てくる質感を表す言葉の共通点や違いに気付くことができた。
 - ・質感を表現するためには、形や色など一部の要素のみでは表現できず、それらを組み合わせることで表現できることが実体験として分かるようになった。
- 2) 課題
 - ・立体表現では質感を意識するようになったが、絵画表現としては意識できていない。平面上にどのようにして表現させるか、的確な題材を扱う必要がある。
 - ・意識が高い生徒と、制作することだけで精一杯の生徒との差が大きい。

4. 附属幼稚園・小学校・中学校での授業実践研究まとめ

今回、各学校園種において、各発達段階に応じて、「質感」を高めるための授業実践研究を行ってきた。幼稚園での実践では、まずは手で触れてみるところからはじまり、子どもたちは、絵の具の手触りや感触を思う存分に楽しむことができていた。活動が進み、偶然に色が混じり合い、色に変化していく様子や、水を加えると滑らかな感触に変化する体験は、後の絵の具の混色・描画指導等の礎となるに違いない。さらに、今回施した環境設定として、壁や床にビニルや模造紙を張詰めたことで、古代の洞窟壁画に見られるような手跡・足跡を残すような原始的な体験が可能となったのはいうまでもない。真っ白で汚れていない大きいキャンバスに自分の手跡をつけた瞬間の喜びと興奮は、誰もが一度は経験したい、あるいは経験したことのある感情である。今回の体験活動をはじめ、子どもたちの質感体験は、そのときの感情と共に記録されていくことであろう。

小学校での実践では、鑑賞の場面で、形状が同じ2つの作品を比較することで、質感の違いという焦点を明確にしている。材質感の違いからどのような印象を受けるかを、言葉で他人と意見を共有する鑑賞活動には、語彙力が必要となるが、高学年ではそれが程度可能となってくる。そして、アーティストが授業に参画し、児童と共に創る活動では、実際に子どもたちの目の前で、主材料であるアルミ箔がアーティストの手によって様々な形に変容する様子を見て、アルミ箔の素材の可能性に触れることができたと考える。児童たちは、アーティストの行為を真似たり、側と一緒に作ったりしながら、繰り返しアルミ箔と戯れることで、体験的に材質を変化させ表現に活かしていく方法を身につけていった。この経験は、今後、素材が別のものになったとしても、児童自身で、その素材の可能性を見出させる手掛かりとなるであろう。

中学校での実践では、とくに立体表現の活動で、素材の違い乗り越えて、本物に似せた質感をいかに追及するかという活動を行っている。そっくりな〇〇を作るという表現活動は、評価基準が端的・客観的で目標を立てやすい。視覚上の質感の追究もあり、すなわち錯視の要素も含まれている。とくに、石を題材にする活動の中で、身近にある何の変哲もないものを、よくよくその対象をみつめ、観察・分析し、鑑賞する行為が必然的になされていることが興味深い。そのことで、生徒らの意識の中で、何の変哲もなかった石が、新しい存在価値と美の対象として深く気を留めるものとなる。また、表現活動の実験的な試行錯誤の課程では、紙と石の質感の違いを目の当たりにし、紙の質感を石の質感へ変化させるための手立てを幾通りも考え、その方法を他人と共有し試していく。そのプロセスは、今後の表現活動にも必要な態度や姿勢をも育てていくであろう。

幼・小・中と行ってきた質感を高めるための実践研究の成果として、子どもたちは発達の特性に応じて質感の感覚を獲得していくことができたと考える。子どもたちが今回獲得した質感力の向上をもって、形・色・質感の統合経験をさらに積み重ねていくことで、共通感覚*を鍛え、ひいては創造的個性を通して社会的自己の発見に寄与できるものとする。

*中村は、共通感覚を、そこで身体中の諸感覚-感覚されたもの-が出会い、結びつき、配置をとり、まとめ、おのずと或る秩序が形づくられるものとしている。¹³⁾

IV. おわりに

今回、「質感」に焦点を当てた研究を行ってきた、改めて「質感力」というものは人間が生きる上で重要な要素の一つであるということを感じた。彫刻家である高村光太郎が「私にとって

此世界は触覚である。触覚はいちばん幼稚な感覚だと言われているが、しかも其れだからいちばん根源的なものであると言える¹⁴⁾と述べているとおり、人間にとって触ることは、考えること・感じること・イメージすることの基本になっており、触ることで、人は世界の本質を直観的に掴み得ることができるということである。カッツは、引用の中で「新生児の原初的空間は口である。口はおそらく、最初の日からずっと、はっきりとした触印象に明確な運動もって反応する唯一の器官である」(W. Stern 「乳児期における空間知覚の発達」)ことを指摘し、乳児にとって触印象の範囲と強度は他の感覚に比べて広く強烈であると述べている。¹⁵⁾これを踏まえて、今後は、よりダイレクトに身の回りの質感・素材感を体験する機会を得られるような、さらなる「触材」を基にした教材開発が必要になってくると考える。すなわち、作品の原料となる原素材(第一次素材)から加工して、様々な二次素材をつくり、それを作品につなげていくような一連の原料から作品になるまでの全過程を一つずつ体験していくことが可能な〈パッケージ〉教材の開発が求められる。幼・小・中の子どもたち個々の発達に応じて、このような素朴であっても人間の生にとってより「根源的」な「質感力」を重視した教材開発および実践研究を行うことが、子どもたちの成長にとって重要なものになると考える。

註

- 1) V.ローウェンフェルド, 美術による人間形成, 竹内清他訳, 黎明書房, 1963, pp.330-334.
- 2) *ibid.*, pp.333-334.
- 3) 柳宗悦, 工藝文化, 岩波文庫, p.122.
- 4) クロード・レヴィ=ストロース, 野生の思考, 大橋保夫訳, みすず書房, 1976, pp.22-23.
- 5) J.J.ギブソン, ギブソン生態学的視覚論, 古崎敬他訳, サイエンス社, 1985, p.137.
- 6) *ibid.*, p.142.
- 7) *ibid.*, p.142.
- 8) 西岡常一・小原二郎, 法隆寺を支えた木, NHKブックス, 1978, p.58.
- 9) ダーヴィッド・カッツ, 触覚の世界, 新曜社, 2003, p.176.
- 10) *ibid.*, p.178.
- 11) 中村雄二郎, 感性の覚醒, 岩波書店, 1975, p.248.
- 12) *ibid.*, p.273.
- 13) *ibid.*, p.91.
- 14) 高村光太郎, 触覚の世界, 青空文庫, 2006, p.2.
- 15) D.カッツ, 触覚の世界, *ibid.*, p.180.

参考文献

- ・幼稚園教育要領解説, 平成20年7月, 文部科学省
- ・小学校学習指導要領解説 図画工作編, 平成20年6月, 文部科学省
- ・中学校学習指導要領解説 美術編, 平成20年7月, 文部科学省
- ・テクタイル 仲谷正史・寛康明・三原聡一郎・南澤孝太, 触楽入門 はじめて世界に触れるときのように, 朝日出版社, 2016.